

記憶の場所としての団地：柴崎友香『千の扉』とその時空間（１）

著者	鈴木 智之
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	66
号	4
ページ	157-181
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.15002/00023187

記憶の場所としての団地

——柴崎友香『千の扉』とその時空間（１）——

鈴木 智 之

１．はじめに

産業化と都市化は、一般に人々の居住地移動の頻度を高めるものである。就学や就労の機会を求めて地域を移動する。結婚して新居を構える。転勤で新しい土地に住み家を得る。一戸建てを購入して移り住む。高齢になって子どもたちが自立したあと、手ごろな家に住み替える、等々。私たちは、人生の節目ごとに転居を重ねながら生きていく。

このように住む家を替えるということは、ほとんどの場合、そのつど新しい場所に暮らしの根を下ろすことであり、したがってまた、それぞれの土地に積み重なってきた固有の時間に触れることでもある。しかし、転入者たちの多くは、自分が暮らし始めた地域がどのような履歴を有しているのかを、あまりよく知らない。この土地にはかつて何があったのか。どんな人が暮らし、どんな出来事があったのか。今ある街の姿は、自分がやってくる以前から連綿と続いてきた出来事の積み重ねの上に成り立っているはずなのだが、その過去は私の目の及ぶところには広がっていない。もちろん、歴史を調べることはできる。それ以前に、現在の地形や風景、町並みや建物などには、かつての人々の営みの痕跡が表れているはずである。しかし、私はその過去を直に知るすべをもたない。

では、このような形で新しい居住空間に生きていく時、かつてこの場所にあったもの、ここに生きた人々、ここに起きた出来事は、今現在の私にどのような関わりをもちうるのだろうか。それらは、今日一日の出来事に直接的な影響を及ぼすわけではないだろう。しかし、人々の暮らし、人間の生が、その環境世界、生活世界の成り立ちと不可分のものであることを思えば、土地の来歴と現在の私の生活がまったく無縁のものだとも言い切れない。では、そこにはどのようなつながりが見いだされるのか。私は、自分が経験することのなかった過去の現実と、どのような関係をもって生きているのか。以下に、一篇の小説作品の読解を通じて考えてみたいのは、この問いである。

考察の対象として取り上げるのは、柴崎友香の『千の扉』（2017年）である。柴崎は、近年のいくつかの作品において、「街」あるいは「家」に着目し、その場所に現れる「痕跡」に触れ、今はもう見えなくなってしまった「過去」とのつながりを見いだす人の姿を描いてきた。記憶と場所、あるいは場所の記憶をめぐる小説的思考の展開。『その街の今は』（2006年）、『わたしがいなかった街で』（2012年）、『春の庭』（2014年）、『パノラマ』（2015年）、そして『千の扉』——主題の連続性を感じさせる作品が、立て続けに私たちのもとに届けられている。これらの作品を読むことに

よって、また作品の舞台としての「街」を見直すことによって、私たちが今生きている場所の成り立ち方、その時空間の様相に言葉を与えることができるのではないか。その予感を頼りに、以下では、『千の扉』を読み直し、このテキストを媒介として都市空間の再発見を試みたい。

2. 『千の扉』——作品の概要

東京、新宿に近い大規模な都営住宅（35棟の集合住宅からなる）が物語の主な舞台である。

中心的な人物として置かれているのは、長尾千歳という女性である。語りが始まる時点（2015年の初夏と思われる、タチアオイの花が咲く季節）で千歳は39歳。1か月前に長尾一俊と結婚し、3週間前から、一俊の祖父・日野勝男が長く暮らしてきた都営住宅の一室（401号室）に住んでいる。勝男は大腿骨の骨折で入院し、退院後は清瀬に住む娘（長尾圭子＝一俊の母）の家に滞在している。いずれは都営住宅に戻るつもりで、一俊と千歳はそれまでの留守番役として、一時的にこの団地に居を置いているのである。

この都営住宅は、一俊が少年時代を過ごした場所でもあり、彼の高校時代の同級生の家族や母・圭子の友人たちも住んでいる。千歳は、団地に暮らす人々との出会いを通じて、少しずつ一俊とその家族の過去にも触れることになる。

作品全体を形作る緩やかな筋は、二つの設定によって導かれている。

ひとつは、千歳が勝男から団地内の人探しを頼まれていることである。高橋征彦という男が団地のどこかの棟に住んでいるはずなので、見つけだしてほしいという。千歳はこの依頼を受けて、団地内を歩き回り、それとおぼしき「高橋」という男を見つけるが、結局その人は目当ての人物とは別人であることが分かる。この依頼と搜索の物語が、ひとつのプロットを構成する。

もうひとつは、一俊の過去に関わる物語である。彼には離婚歴があるのだが、先妻がどんな人で、どんな理由で別れたのかを千歳は知らない。興味はあるのだが、なんとなく聞きそびれている。しかし、一俊の昔の同級生たちの集まりの中で前の妻のことが話題になり、それをきっかけに夫が千歳にある事実を隠していたことが分かる。それが理由で、千歳は一時期団地の部屋を出て、近在の喫茶店「カトレア」の二階の部屋に転がり込むことになる。しかし、結局一俊と千歳は、再び共に暮らしていくことを選択する。

この二つの筋を縦糸として語りは導かれていく。しかし、実際に作品の絵柄を構成しているのは、彼女たちの物語以上に、団地という場所そのものであるように見える。そして、上にあげた二つのストーリーもこの空間の相関項として意味を帯びている。東京の、中心地からさほど離れていない地点にあるこの巨大な都営住宅とは、いったいどのような^{トボス}場所なのか。そこに焦点を置きながら、以下（第6節まで）では、この小説のテキストがどのような^{クロノトボス}時空間を現出させているのかを読み取っていかう。

3. 「団地」という場所——その時空間配置

まず、作品中で、この「団地」がどのような空間として描き出されているのかをたどり直してみる。

(1) 並列と反復

千歳が暮らす「団地」は、低層棟、高層棟を合わせて35棟からなる。1970年頃から入居が始まった都営住宅である¹⁾。そこには「三千戸もの部屋」があり、「七千人近い人間が住んで」いる(9)。こうした大規模な集合住宅は、言うまでもなく、同型の部屋(各世帯の居住空間)を並列的に配置して集積させる場所である。その光景は、「膨大な数の窓とベランダ」(9)、あるいは各棟のエントランススペースにびっしりと並ぶ「ポスト」(30)によって、視覚的に表されている。

エレベーターの先の左側に集合ポストがある。四角い空間の三面の壁に、銀色の小型ポストが数える気が失せるほどびっしりと並ぶ。懐かしい。子供のころ住んでいた市営住宅の高層棟のポストとまったく同じ。(30)

しかし、この同型の居住空間の並列は、この団地の内部において成立しているだけではない。同じ時代に建設された集合住宅は、地域を超えて同一の設計に従っており、同じ間取り、同じ広さの「部屋」が、各地に存在している。そして、千歳が子ども時代に暮らしていた大阪の市営住宅の部屋が、今住んでいる部屋と完全に同型のものであった、とされる。

この四〇一号室に住み始めてまだ三週間。すでに部屋の中は目をつぶってでも歩けるほど馴染んでいる。同じだったからだ。部屋の広さも数も、玄関を入れてすぐ右に台所、左側に三畳の部屋なのも、同じ。生まれてから高校二年まで暮らした部屋と、築年から^{へいべい}平米数、窓の形までほとんど、一致していた。(7)

千歳が高校2年生まで住んでいた「市営住宅」と、この「都営住宅」は「築年数」が同じで、地理的空間の隔たりを超え、まったく同じ間取りの空間を作り出している。したがって、千歳の視点に立てば、同じ形の部屋は、単に空間的に並列されているばかりでなく、時間的な経過の中で反復的に現れる場所となっている²⁾。

建築様式の高質性は、単に生活の器、居住の“箱”が同じ形をしているということだけを指すわけではない。その“箱”の使われ方は、人々の「生活様式」の同型性と相乗的に作用して、互いに似通った室内の風景を現出させることにもなる。例えば、千歳が、古くから団地の隣室に住んでいる「川井さん」という女性の部屋を訪ねる場面があるのだが、その時千歳は、部屋に入る前からそこに「仏壇」があることを予期している(その前に、線香のにおいがするという伏線は引かれてい

るのだが…。

千歳が想像したとおり、川井さんの部屋には仏壇があった。千歳が住んでいる四〇一号室と左右反転した間取りの、北側六畳間の窓際に黒光りする古い仏壇が扉を開けて鎮座していた。
(73)

「間取り」だけではない。そこに置かれているもの、居住空間に意味を充填するアイテム（ここでは、仏壇）の存在まで予想できてしまう。そこにも、「生活の場」の並列と反復の様相がある。

ただし、こうした予期が可能になっているのは、千歳がかつて住んでいた部屋に仏壇があったからでも、また今住んでいる日野勝男の部屋に仏壇が置かれているからでもない。

千歳が子供の頃に住んでいた、この部屋と左右対称なだけで間取りも広さもそっくりな部屋には、仏壇は置かれていなかった。千歳の父も母ももともと親戚の数も少なければ法事などの行事にもめったになかった。近所の同級生の家に行って、数えたことはないが、おそらく半数近い家には、狭い部屋の中に黒塗りの立派な仏壇があって、ときには友人の祖母か誰かがお経をあげたりままごとのごはんみたいなものを用意したりしていた。(110)

千歳は、その様子を横目で見ながら、「これがない自分の家はなにかが足りないのではないかとすることもあった」(110)。つまり彼女は、仏壇の不在を、自分の家族にまつわる“欠損のしるし”として受け止めているのである。

都営住宅や公団住宅は基本的に核家族を想定して設計されており、とりわけ建設直後にそこに居を構えた人々の多くは、“家”のつながりから離れて、都市に新しい家族を創設する世代に属していた。しかし、その住宅の「半数」に「仏壇」が置かれている。それは、それぞれの夫婦家族世帯が、先祖祭祀によって維持される系譜関係から無縁のものになっていないということ、精神的には直系の親族組織——家——の継承者であり続けていたことを示している。団地の中に、象徴的に呼び込まれた家制度としての仏壇。それは、人口移動と世帯人数の縮小（核家族化）によって、一見すると孤立していたように見える家族が、実質的には親族的なネットワークにつながっていたことを物語る。だからこそ、「仏壇」の不在に千歳は、自分の家族には「何かが足りない」のではないかと思ったのである。

そして、勝男の部屋にもまた仏壇がない。それは、やはりある種の“欠損”を示しており、物語上の意味を有するように思われるのだが、この点についてはまたのちに触れよう。

いずれにせよ、「団地」は同じ形の“箱”を並列させながら、そこに似通った暮らしを現出させる。「量産型団地の量産型わたしたち」(28)と、千歳は言う。少なくとも外観の上では互いに識別しづらい“生活”が大量に反復される空間として、この場所は準備されている。

（２）秩序と社交性

並列する同型の空間に7000人近い人が住むこの団地は、混沌とした無秩序の空間ではない。各棟の入口のホールに並ぶ郵便受けは、「一つ一つに、名前がちゃんと書いてある」。「今どきの集合住宅でこんなにきちんと名前が示されているところはめずらしい」。「この団地は、管理も掃除も行き届いていて、緑も豊かだし、今まで見てきた団地の中では明るく快適なほうだ」（31）と千歳は感じている。共有スペースの一斉清掃も、当番制で行われている。

日曜の朝、千歳は一俊と当番が回ってきた一斉清掃に参加した。低層棟の場合、清掃当番は階段が単位になる。一つの階段に向き合う二部屋×一階から五階までの十軒。

遊歩道や自転車置き場、側溝を皆で掃除する。植え込みは、千歳の住む棟の場合、一階と二階の住人の手入れが行き届いているからなにもなくてよかった。（144）

そして、何より高齢化した団地の住人たちは、安定的な生活習慣を守り、秩序正しく日々の暮らしを送っている。

年配の人は生活が規則正しい。と、結婚相手の両親と同居した友人が言っていたし、窓から外を眺めていても実感した。団地内をうろろろしているのをしょっちゅう目撃されると怪しまれるかと考え、時間や歩くコースを変えている。（13）

千歳は、高橋という男を探して団地内を歩き回っているのだが、その“探偵行為”は大都市的な混沌の中に紛れることができず、住人たちが規則的な生活を営む空間においてはどうしても目につきやすいものになってしまう。一面に並ぶ窓とベランダは、“逆パノプティコン（衆人監視）”的な装置として、いつ誰に見られているか分からないという緊張感をもたらしめている。

団地内のそれぞれの住居は、（鍵のかかるドアによって守られた）独立したプライベート・スペースであるが、間取りの同型性からも、また古い団地ならではの“遮音性の低さ”からも、相互に完全に閉じた空間にはならない。生活音は壁を超えて隣室に、そして廊下へと漏れ出す。それは、かつての“長屋”と同じように、見えてはいなくとも隣近所の暮らしぶりがうかがい知れるような、緩く仕切られた個別空間の並列を生み出す。例えば、高層棟の十階のエレベーターを降りた千歳の前に広がる光景が、それを示している。

十階で降りると、風が心地よかった。廊下から東京の街が見渡せた。雲の向こうで傾いて行く日差しがいいなあ、と千歳は思った。子供のころ住んでいた団地でも、高層階に住んでいる同級生が羨ましかった。

長い長い廊下には、水色の扉がいくつも並んでいた。どこかからか、玉葱^{いた}を炒めているときのにおいが漂ってきた。大きな声で、たぶん電話をしているのも漏れ聞こえてきた。（197）

においも声も外廊下まで漏れてくる。仕切られてはいるが、その内部での生活ぶりが目に浮かんでしまうような“半開放性”。その空間的なつながりの上に、団地内の、互いに孤絶しているようにいながら、どこか下町的な近接感のある関係が保たれているのである。

(3) 老いていく場所

この都営住宅には、1970年前後から入居が始まっている。戦後の高度経済成長期に大都市へと流入してきた単身者たち、あるいは戦争で家族を失い、住む家をなくした人々が新しく世帯を構え、家族を作っていく場所としての団地。かつては、若い夫婦とその子どもたちからなる核家族が、その世帯構成の中心だったはずである。こうした人口を想定して、大規模団地は、その生活上の必要を一通り団地内でまかなえるように、商店街を組み込み、学校や幼稚園や保育施設を敷設してきた。

今、それらの商業施設や教育施設は、かつてのような活気を保ち切れてはいないが、“オリンピック”や“万博”に日本中が高揚感を覚えていた時代の名残をとどめている。

三五棟の建物のうち、一階部分が商店になっている棟が、三つある。

千歳の住む棟から近いところは、半分がシャッターが下りたまま、残りはデイサービスの事務所や倉庫になっているが、幹線道路に近い大型棟の下は、まだなんとか「商店街」と呼べる雰囲気が残っている。色の褪^あせた万国旗がジグザグにかかっている。今はない国の国旗がないか見上げたが、見つけれなかった。(24)

「万国旗」というものがもっていた時代性。「今はない国」の旗があるかもという思いを挿入することで、それが過去の遺物であることがさりげなくほのめかされている。

それでも、「商店街」の一部は、まだそれなりの活気を保っている。だが、入居開始から40年以上の歳月が過ぎ、団地の人口は一斉に高齢化している。

雨が三日続いた。

昼過ぎにようやく止んだのを確かめて、千歳は買い物ついでに団地を一周した。この団地には三十を超える棟があるが、一階が保育園になっているところもある。これも、千歳が育った市営住宅と同じだった。以前はもう一か所保育所があった、と一俊に聞いた。約七千人が住んでいるこの団地は、住人の半分以上が六十五歳以上。建築がはじまってから数年間に結婚したり子供が生まれたばかりだったりして入居した人々は、四十五年が経つあいだにいっしょに年を取り、一斉に老いた。(35)

日野勝男はこの団地に40年以上住み続けてきた。他にも、一俊が子どもだったころから、ずっとここにとどまっている人が数多くいる。団地に流れる時間は、彼らのあまり大きく変わることの

ない暮らしとともにある。もちろん子どもたちは成長し、やがて家を出ていくのであるし、勝男たちもまた老いていくのであるが、その変化は、次々と相貌を変えていく周辺の都市空間に比べれば、ずっと緩やかなものを感じられる。

子供たちが出ていったあと、親だけになる。家賃を考えればほかへは移れない人もいる。川井さんのように、そして勝男のように、この場所に住み続けたい人も多くいる。そして、建物も住む人も、すべてがゆっくりと衰えて行く。新しいビルや高層マンションが次々と驚くようなスピードで増え続ける都市の真ん中で、ここは時間の速度が落ちていくように、千歳には感じられた。(177)

この空間に基調を与えているのは、都市の再開発のリズムから取り残されて、ゆっくりと進んでいく「古い」の時間である。

(4) 江戸・東京の周縁、歴史の痕跡

しかし、この場所に時間性を与えているのは、団地に暮らしてきた人々の生活史上の履歴だけではない。その基層には、団地として開発される前から特異な用途に使われてきた、この土地の歴史がある。

居住棟の周辺は巨木に成長した樺や桜の樹で覆われているが、それは大昔からここが森だったということではなく、「団地の開発とともに植えられた」木々がそれだけ育ったということである。

団地内で高く伸びた樺やずいぶん幹の太くなった桜は大昔からこの場所にあるような気がしてしまうが、木々も団地の開発とともに植えられたものだ。その前、ここは戦後の住宅難解消のため建設された木造の住宅が並んでいた。その前は、陸軍の施設があった。その前は、武家屋敷と庭園が造られ馬が走っていた。その前は、雑木林だったかさびしい野原だったか。(35-36)

武家屋敷、そして陸軍施設。その土地利用の履歴は、この場所が江戸そして東京の市街の周縁部に位置していたことを示す。江戸時代、都市の中心から広がっていった家並みが尽きて、雑木林か野原かにつきあたるその境に、大きな庭園をもつ大名屋敷が建てられた。もとより江戸は、高低差の大きな、坂の多い町であったが、この場所も敷地の中にそれなりの起伏を抱えている。そして、そこには池が掘られ、その土を盛って山が作られた。そのようにして借景的な造園がなされたということであろう。その跡が、今も団地の中にそのまま残っている。

東京の土地は細かな高低差が入り組んでいるのが特徴だが、この広大な団地の敷地も、崖のような場所があったり、なだらかな窪地があったりと、かなり複雑な地形だった。そして、そ

の中心には、山がある。標高四十四メートル。山手線内でいちばん標高が高いとはいえ、見た目にはちょっとした丘という程度だから、遊歩道の脇に設置された「登山道入口」という看板を大げさだと千歳は笑ったが、実際に上ってみるとけっこうな急斜面で、確かに「山」だと思った。この一帯は、江戸時代に武家屋敷の庭園が造られた。川を流し、大きな池を掘り、その土を盛って山ができた。滝や宿場町を模した町並みまで作った。(13)

そして、明治時代になると、都市周辺のこの広大な土地は陸軍のものとなり、軍の学校や音楽隊の活動の場となる。そして、近接する場所に病院が建てられる。

その名残は、今も団地の中に点在している。そして、こうした過去の来歴が、場所にまつわるある種の想像力を喚起する。かくしてここには、「怪談」や「都市伝説」が数多く語られるのである。

インターネットで検索すれば、ここに陸軍の施設があったことや土中から人骨が大量に出てきて人体実験の疑いもあったことや、その場所に建てられた感染症の病院にまつわる怪談話や都市伝説の類がいくつも出てくる。サイトの黒い画面や無人の風景から受けるイメージは、この場所で実際に暮らしていると大なり小なり誇張されたものに感じられる。(147)

例えば、子ども時代にここに住んでいた一俊は、団地の中にトンネルがあるとみんな信じていたという。

「小学生のとき、この中にトンネルがあるってみんな信じてたんだよね。夜中に茂みに入っていく女の人を見たとか、入り込んでたホームレスの人が忽然と消えたとか、そういう話、いろいろ聞いた」(58-59)

「トンネルの入り口、ほんとにあったんだよ。向こうの、病院の石垣に。二年前に通ったら、完全に塞^{ふさ}がれちゃってたけど」(59)

その「トンネル」は、団地に隣接する大きな医療センターの外郭の石垣にあったという。生死の境を示す場所との境に開かれていた“穴”。そのトンネルを「奥のほうにずっと歩いていったら、この団地のどこかの部屋に出る」(59)と信じられていたのである。

しかも、そのような噂話が流通したのは、一俊がまだ子どもであった過去の時代だけのことではない。越してきたばかりの千歳が団地の中で出会ったメイという少女もまた、「トンネルの入り口を探している。

「みんな言ってる。その部屋は、未来の世界で、自分も五年後とか十年後の姿になってるって」(165)

どうやらこの団地は、人々のイマジネールにおいて時空の歪みを抱えている。その時間と空間の亀裂への入口として、「トンネル」の跡が想像力を喚起する装置になっている。

千歳は、こうした場所の来歴を、今日の前に広がっている空間に重ね合わせながら、確認していく。

確かに、標高四十四メートルの山のそばには、石造りの建物の一部が残っている。陸軍の音楽学校だったと知れば、それなりの感慨がある。古びた石の表面から、時間の経過を想像することもできる。しかしその石造りの建造物は今では教会と幼稚園の一部になっていて、幼稚園側には子供を乗せる椅子のついた自転車が並ぶ。立派な枝振りの桜から木漏れ日が差す斜面を、犬を連れた人が横切る。坂道をジャージを着た学生が走っていく。低層棟のベランダに花柄の布団が干してある。

それが今ここで千歳に見えるもののすべてで、いくら目を凝らしても軍服を着た人や幽霊は千歳には見えたりはしない。山の上から東京中が見渡せたという焼け野原も見えない。団地の巨大な建物が日差しを反射して白く光り、その向こうにはタワーマンションが建設中で、さらに先には新宿にひしめくように超高層ビルが立っている。

この巨大な街の全体が、七十年前には何度も空襲を受けて焼き尽くされたとは、歩いていても買い物をしていても電車に乗っていても、感じられなかった。そんなことは忘れてしまったように、はじめからなにごともなかったかのように、街は日々動いていた。(147-148)

かくしてこの場所には、幾層もの異質な時間が流れ、堆積している。

ほんの数週間前にこの団地に移り住んできた千歳は、ここを仮の住み家として生活していく中で、この空間を構成してきた過去、あるいは過去から続く多様な時間の様相に触れていく。その過去は、軍人の姿や幽霊が千歳には見えないように、直接的な形では現前しないのだが、それでも『千の扉』は彼女が場所の記憶を発見していく物語だと言える。

そして、この点において今度は、千歳が子ども時代を過ごした大阪の市営住宅とこの都営住宅との“差異”が意味をもって浮かび上がる。先に、二つの団地はまったく同じ設計に基づいて建てられており、千歳の前には相同的な空間が反復的に表れていることを見たが、建造物が同型でも、その土地の来歴が異なっている。「千歳の住んでいた街は埋め立て地で、小学校が建つ前はなににもなかった」(211)のである。

「わたし、埋め立て地の工場に囲まれたところで、団地と家が高密度なところで育ったから、人間が作ったものしか周りになかった。それ以外のものは怖い。木も、動物も、暗闇も、近寄ると飲み込まれそうな気がする」(47)

千歳は、埋め立て地に造られた「街」で生まれ育った。それは人工物によって構成され、「それ以外のもの」がない空間であった。だから、彼女は、その“人工的空間”を脅かす“外部”のものを恐れている。団地が建つ以前には「なにもなかった」。千歳は“記憶なき土地”の子どもである。その子が成長し、東京に流れ込み、まったく同じ規格を備えた「団地」に行き着く。しかし、その場所には来歴があり、記憶がある。

『千の扉』は、記憶なき土地からやってきた者が、土地に埋め込まれた記憶に触れ、この場所に降り積もる時間を発見する物語なのである³⁾。

4. 千歳の物語

この団地の時空間の配置と、千歳たち登場人物の物語とはどのような接続関係にあるのだろうか。

(1) 浮遊する自己物語——想起の空間としての団地

『千の扉』は、それぞれの場面を三人称の語りで描き取ってゆく短い節の連続として構成されている。後に見るように、その中には千歳がまだこの団地にやってくる前のシーンも織り込まれており、そこでは、勝男や圭子や一俊などが実質的な視点人物となっている。しかし、その他のほとんどは千歳の目線から出来事がとらえられている。こうした語りの編成は、この作品を「千歳の物語」として読み進めることをうながす（少なくともそれがは読み手にとってごく自然な態度である）。

しかし、千歳はどのような物語を生きているのか。それは、思いの外つかみどころがない。彼女はふわふわと生きているように見え、何が彼女にとっての“生活史上の課題”であるのかが分かりにくい。物語とは一般に、登場人物が何らかの緊張や葛藤を経験し、その問題を解除しようとしたり試練を乗り越えようとしたりすることによって進行していくものであるが、千歳については、その物語を駆動している問いが明瞭に浮かんでこない。

長尾千歳は、大阪の市営住宅に育ち、京都の小さな大学に学んだのち、「神戸にあった服飾雑貨の会社に就職」、「その四年後に、東京の関連会社に移った」(21)。その会社の事務所は「浅草橋と御徒町の間」にあり、建設中のスカイツリーが道の向うにどんどん姿を現す様子を見ていた。しかし、5年前に「体調を崩して退社」(22)。その後は「断続的にアルバイトをし、それから以前の仕事で関わったことのある雑貨の輸入会社で契約社員として働いた」(23)。夫となる一俊は、その輸入会社の同僚の友人で、かつ取引先の社員であった。会って3回目の忘年会の席ではじめて長く言葉を交わした。その1週間後に、一俊から「結婚しませんか?」と言われ、結婚することにする。千歳は、突然に求婚した一俊の真意をよくつかめずにいるし、その一俊と結婚した真意を尋ねられても「自分だって説明できないに違いない」(24)と思っている。

どこかこの結婚そのものが“謎”めいていて、その“意図”や“意味”が浮遊したまま、二人の生活は始まっている。この団地での居住はおそらく一時的なものであるが、千歳にとっては、一俊

の祖父が暮らした家、一俊自身が少年時代を過ごした場所へと参入していく、緩やかなイニシエーションの過程となっている。そうだとすれば、この通過儀礼を無事に經由して、彼女が人生の次のステージに進んでいけるかどうか問われているのだと言えるだろう。実際に彼女は、夫の親族関係や友人関係あるいは近隣関係のネットワークの中に入って行って、そこでの居心地を確かめながら、関係を築こうと努力している。だが、その一方で、千歳にとってのこの結婚の意味がはっきりと語られていないので、なにか流されるように、機会に乗じてしまっただけの行動であるとも取れる。団地の中を、うろうろと歩き回っている千歳の姿は、漂流してこの場所に紛れ込んでしまった“よそ者”の落ち着きのなさを表しているようである。少なくとも、ここに定着すること（根を下ろすこと）が千歳にとっての課題ではない。彼女にとって、この団地は通過していくべき場所なのだ。

しかし、「誰もが納得するような説明」(24)をすることができないような結婚を現に選んだとしても、やはりそのことを千歳は自分自身のこととして、自分の生を象るものとして受け止めなければならないだろう。ふわふわと浮遊的に生きてきた自分の前に現れて、突然「結婚」を申し込む男。その偶発的な申し出を受け入れることで、彼女は（ひとつの意思をもって）自分の生活をどこかに推し進めようとしている。それは、具体的に何を得るとか、何を成し遂げるといふこととは別に、千歳にとっては、やはり“一步前に踏み出す”決断であったように思える。

千歳にとって結婚の理由は、“愛情”とか“生活の安定（向上）”といった分かりやすい動機づけとは別の水準にある。そうではなくて、ある場所に、ある存在として、言い換えれば誰かとの関係の中で時を過ごしていくこと、それ自体の手ごたえを確かめることが大切になっているようだ。

そんなことを思わせるひとつの場面がある。それは、団地の部屋で夫と肉体的な関係を結び、そのまま眠りついてしまった千歳が、「明け方」に目を覚ますシーンである。

そっと起き上がり、台所で水を飲んで部屋に戻ると、薄闇の下で一俊が上半身はなにも着ないまま転がっていた。千歳は傍らにしゃがみ込み、タオルケットをかけてやった。三時間ほど前に、自分の上に乗っかっていたその肌が、ゆっくり明けていく青い光に浮かび上がっているのを眺めた。

人間は重い。一俊の肌の温度と水分を受け止めていたとき、千歳はそう思っていた。見た感じよりも、ずっと重い。この重さに、なんとなく^{あんど}安堵する。この体には、骨やら内臓やら血やら、いろんなものがちゃんと詰まっているのだと思う。この人と暮らしてみることにして、よかったと思った。自分は、人間の中にそういうものが詰まっていることを、すぐに忘れてしまうから。(58)

ここで千歳に「安堵」を与えているもの、そして「この人と暮らしてみることにして、よかった」と思わせているものは、一俊の肌の温度と汗、そしてその「重み」である。その“質量”を感じられることが、まず何よりこの男とともに暮らすことの意味である。それは、自分自身がそうし

た“存在の質量”を、自分一人では感じられないということの裏返しでもある。

ともあれ、このようにして千歳は、一俊との生活（結婚）という選択が何かしら確かなもの（ここで、「重さ」として語られるもの）を与えてくれるかどうかを測っている。彼女なりに、ある種の“賭け”がなされている、と言い換えてもいいだろう。

では、千歳が“生活者”としての実質感を獲得していく物語の文脈として、この団地はどのような関わりを示しているのであろうか。

これを考えると、この「都営住宅」と大阪の「市営住宅」が空間的に相同的で、それゆえに千歳は、この場所を既視感とともに経験し、かつ頻繁に自分の子ども時代を想起していることがある意味を帯びているように思える。

この空間的条件は、彼女に、自分が同じ場所にいるという感覚（反復あるいは滞留の感覚）と、時の経過を経験してきたという感覚（持続と変化の感覚）とを同時にもたらしている。ある意味では、「団地」（市営住宅）に生まれ育った千歳は、成長し、時を経て、まったく同じ「団地」（都営住宅）に舞い戻ってしまったとも言える。大阪から京都、京都から神戸、そして東京へと居住の場を移し、社会的な身分を変えながら、しかし彼女は“何者かになる”物語を生きてきたように見えない。過去から未来へと進んでいく確かな時の経過を、千歳は生きてきたのだろうか。同型の空間への回帰は、この“進んでいかない時間”、“反復するだけの時間”の感覚に呼応する。

日野勝男が過ごしてきた部屋の絨毯の上に寝ころびながら、千歳は、市営住宅時代のことを思い出し、こう思う。

自分はもしかして、あの市営住宅の部屋にまだいるんじゃないか、と考える。二十五年、その間に行った高校も大学も、会社勤めをしていたことも、いくつもの仕事も、全部、たいした意味はなく、眠っている間に夢を見たようなもので、実は同じところにずっといた。ほんとうにそうだとすると、その経験を得てできあがった内面を保ったままもう一度小学生として学校へ行けるならおもしろいだろう。(8)

空間の相同性が、時の経過の実感とその中での過去の経験の重さを希薄なものにしている。自分はずっと同じ場所にいて、眠っているあいだに夢を見ていただけなのではないか。そういう感覚、生活史的履歴の浮遊感とでも言えばよいだろうか、時間が無化されていく感覚が、（団地という）場所の反復によってもたらされている。

とはいえ、他方で千歳は、すでに時は過ぎてしまったことも、この想起を通じて確かに自覚している。上の引用に続けて、彼女は言う。

もちろん、そんなことはない。三十年分の時間は確実に過ぎていて、自分自身がその時間を確実に使っている。どう見ても小学生ではないし、宿題をきちんとやり終えてから遊びに行つて誰とでも仲良くできる優秀な子供に今度はなれるなんて、馬鹿げた夢に過ぎない。(8-9)

かくして、都営住宅と大阪の市営住宅との空間的相同性は、千歳が過去の生活を頻繁に想起する契機となり、それは“時が過ぎていない”という感覚と“時は確実に過ぎてしまった”という感覚を同時にもたらしている。“何も変わっていない”，でも“やりなおすことはできない”。“同じことがくり返されている”，でも“時間は経過してしまった”。この二面性をともないながら想起される過去は、今の自分を確かに支えてくれる“履歴”としての重みをもてずにいる。

同質の感覚は、千歳が自室のエアコンのスイッチを入れる、という場面でも語られる。勝男がずっとエアコンが故障したままの状態で放置していたという話を受けて、千歳は昔を思い出す。

子供の頃住んでいた部屋でも、クーラーをつけた覚えがない。千歳は、締め切った窓の外、ぎらぎらとまぶしい世界を眺めながら、記憶をたぐった。

ベランダ側の壁にあったのは、焦げ茶色の家具調クーラーだった。リモコンではなくて、壁に固定されたつまみをひねる仕組みだった。両側の窓を開けていれば、じゅうぶんに風が通った。夜は特に。宿題をしていたプリントが窓から飛んで行ってしまって、慌てて階段を駆け下りて探しに行ったこともあった。夏の間は、玄関も開けっ放しのことがあった。かまぼこ板をドアの下に挟んでいた。開けたまま子供だけで家にいても、危ないとも言われなかった。

時間が経った、と思う。

何年も思い出しもしなかったことが、こうして次々と鮮やかに浮かんできても、本当にあったことなのだろうか、と思えてくる。映画かドラマで見た場面を、自分の記憶と勘違いしていると人に言われたら、まぎれもなく自分の人生だとちゃんと証明できるだろうか。(78)

自分が自分の人生をちゃんと生きているという感覚が成り立つには、自分の記憶している過去が（想起の精度はどうあれ）確かに自分の経験してきた現実なのだという確信が必要である。それがおぼつかなくなれば、“今ここに生きている私”という存在の確かさもまた危うくなる。

ともあれ、団地は千歳にくり返し想起をうながす。30年前の「団地」と現在の「団地」。大阪と東京という、空間的には隔てられた位置にありながら、そのまったくの空間的同型性は、それを時間軸上において比較・対照することを可能にする。変わらないものと変ってしまったもの。そして、その変化の時間が、千歳の記憶を媒体として、私たちの前に現出する。団地は、その時間を現出させる物質的装置である。

千歳に問われているのは、その「団地」の時間を、自己の生活史的時間に重ねて、ひとつの軌跡を実感できるかどうか、過去から現在へとつながってきた生活史に“実在の感覚”を呼び込むことができるのかどうか、にある。

（2）夫の過去に触れる場所

こうした状態で千歳は、“ふわふわ”とした感覚のまま、新しい人生のフェイズ（結婚生活）に

足を踏み入れようとしている。ありきたりな言い方をすれば、一俊との生活を築き、そこに自分の存在する場所を見つけだしていくことが、彼女の現在の課題なのである。それは、夫・一俊が少年時代に過ごしてきた生活、そして、自分と出会う前に生きてきた物語の世界に足を踏み入れ、その生活圏に自己を位置づけていくということでもある。この団地を知るということが、夫の生きてきた生活世界を知ることなのだ。

一俊は、小学校から中学校にかけての6年間（両親が、熱海で仕事をしている期間）勝男に預けられて、二人でこの団地に暮らしていた。学校の同級生たちの家族は、今もここに住んでいる。あるいは、昔の彼のことを知る古い住人がいる。

千歳が団地内のラーメン屋に入ると、一俊の高校の部活（手芸部）の後輩だという女・中村枝里が声をかけてくる。枝里の兄は、今はもう団地には住んでいないが、一俊の同級生であったという。こうしたつながりを介して、千歳は一俊の古くからの友人関係の中に入り込んでいく。それは、ほとんど素性を知らないままに結婚した男の過去に触れることでもある。

一俊が過去に結婚していたことは聞かされている。しかし、それがどんな相手だったのか、どんな夫婦生活だったのか、そしてなぜ別れてしまったのか。そうしたことを千歳は何ひとつ知らない。興味がないわけではないのだが、なんとなく誰にも聞きそびれている。新宿御苑で一緒にランチを食べながら、千歳は思う。

前に結婚していたときも、一俊はこんなふうになどどこかの公園に行ったりしたのだろうか。「カトレア」で同級生の女子たちと会話を聞いていても、いつでも誰に対してもふるまいは変わらなかったのも、積極的に賑やかな場所で遊んだり海だとか山だとかに行ったりしていたとも思えない。たまには旅行にでも出かけよう、と言われていたかもしれない。前にテレビを見ているときに沖縄に行ったことがあると言っていたのは、前妻と行ったのかもしれないけど。

(86)

この前妻への興味は、いわゆる嫉妬の感情とは少し異なる。他の女性との関係に嫉妬するには、千歳には、一俊への“恋愛的感情”が欠けているように見えるからである。むしろそれは「一俊」という存在の“謎”に向けられた関心ではないだろうか。4度目に会って、つきあっていただけでもない女性に結婚を申し込むこの男。少し前に離婚を経験したらしいのだが、その理由もよく分からない。（同僚の話では）特にDVとか借金等の問題があったわけではないらしい。その不思議な男との生活を選んでしまった女にとって、夫の過去はやはり気になるものである。それは不思議なことではないし、千歳の詮索の態度は、“常識的”に考えればむしろ控え目だと言ってもいい。

高校の「手芸部」の仲間たちとの集まりは、千歳にとって、過去の一俊の姿をうかがう絶好の機会である。そして、その場での夫のふるまい、他の仲間たちとの交流の雰囲気、千歳はある種の安堵感を覚え、強い疎外感を感じることもなくその輪に加わっている。

一俊は、再会の感激など微塵^{みじん}もない表情で、隣のテーブルの席に腰を下ろした。そのあと、あゆみがお祝いとしてワインを一本提供し、さらに酔った女たちは、千歳にはわからない同級生たちの話を楽し気にし続けた。千歳はゆっくりワインを飲みながら、それを聞いていた。疎外感はなかった。むしろ、この数年なかったほどの安らぎを感じた。自分が何を言えばいいか、どう答えるか、気にしなくていい会話が好きだった。それならいつまでも聞いていたかった。それに、一俊が自分と話しているときとほとんど変わらないことが確かめられたので、今日の会合は意義があったと感じた。一俊は家にいるときと同じ、聞いているのかいないのかわからないような応答で、それでも元手芸部員たちに受け入れられているようなので、安心した。

(46)

夫が過去に所属していたコミュニティ——記憶の共同体としての同窓生集団——の中に、自分がスムーズに溶け込んでいる感覚。そして、自分と夫の関係が、切れ目なくその社交圏につながっていることの確認。これが、千歳を「安心」させている。その安心感は、自分が“ここ”で、“この人とともに”生活を築いていけそうだという、緩やかな見通しの醸成に通じている。夫の過去に触れることは、これから生活しようとしている場所が、自分の身に馴染む場所であるかどうかを確認する作業でもある。

ところが、ある日、同級生たちの集まりをきっかけとして、一俊が千歳に「ちゃんと話しておいたほうがいいこと」があると切り出す。それは、喫茶「カトレア」での「手芸部」仲間の飲み会に、水島という初対面の男が現れ、酔った勢いで、一俊の妻であった「マリコ」に「双子が生まれた」、「だから、みんな長尾のことを慰めてやってよ」と言い出した日のことであった。その夜一俊は、団地の部屋に戻ると、畳に正座して千歳に語り始める。

一俊の話は、千歳とはじめて親しく話をした「忘年会」の時の記憶にさかのぼる。その席で、酔った千歳は同僚の小川奈々に向かって、自分が「卵巣」を片方摘出する手術をした影響でピルを飲んでいること、「今後妊娠する確率は低い」と言われたが「子供は、もともと絶対」にはほしいとは思っていなかったで、「そこまでショックはなかった」ことを話していた。その会話を、一俊はすぐ近くで聞いていたのだという。そして、先妻との離婚は「不妊治療に関しての気持ちの不一致が理由だった」と告白する。「マリコ」は子どもを望んでいたが、なかなか妊娠せず、検査を受けたところ、一俊の方に「原因」があることが分かった。そして、その後、マリコの気持ちが「冷めて」しまう。そして、「これからこの人となにかをいっしょにやっていこうという気持ちがなくなってしまった」と、「離婚」を切り出された。一俊は、自分が「彼女を傷つけたことを痛感し、自分自身を失望させた」、そして「自分はもう誰かと結婚などしない方がいい、と思った」(187)。ところが、その「忘年会の日、千歳の話を聞いていて、この人と生きていきたい、と突然思った」(188)のだと言う。

この“告白”を聞いて、千歳は何か「納得」のいかないものを感じ、とりあえず「家を出て」「カトレア」に転がり込むことにする。しかし、「自分がなににいちばん納得が行かなくて家を出て

きたのか、千歳は自分でも判然としなかった。一俊の話を聞いたときも、ものすごく腹が立った、という感じではなかった」(189)。

では、どうして彼女は家を出てしまったのだろうか。

生殖能力に問題があって離婚を経験した男が、妊娠を期待していない女の登場を好都合と思って結婚を申し込んだことへの憤り。あるいはそれ以前に、結婚をする前に“子どもは作れない”という大事なことを話してくれなかったことへの怒り。“妊娠できない自分”が“憐れみ”の目で見られていたことへの苛立ち。千歳がこの場で抱いてもおかしくない思いや表明してもいいと思える感情は、確かにある。しかし、そんな分かりやすい言葉で括れる感覚と、ここで千歳が感じているものとは、どこか違うらしい。

では、何が、どう千歳を戸惑わせているのか。

それは、千歳本人が分からないと言っていることであり、その後にテキストが正解を示してくれていることでもないの、読者に投げかけられた「(答えのない) 問い」のようなものとして受け止めるしかない。その上でひとつの“解釈”を示せば、千歳が戸惑っているのは、一俊の求婚にそんな“動機”めいたものがあり、したがって“物語”があり、“意味”があることへの違和感ではなかっただろうか。

千歳は、終始、自分がなぜ一俊と一緒に暮らしていくことを選んだのかを“語りえないこと”、“語らずとも成り立つこと”として置いているように感じられる。何の根拠もなく決断される実存的な跳躍、みたいなことではない。どこか自分自身の中に“これを選ぶ”必然のようなものは感受されているのだが、それは誰かに話して伝わるような類のものではないし、一緒に生活していく中で手触りとして確かめていくしかないものとして、静かに(沈黙のうちに)受け止められている。

そんな風に、“なぜ”“なんのために”を言葉にして問わなくても始められる生活のパートナーとして、一俊という人が“いい感じ”に現れていたように見える。その男が、失敗とか、傷心とか、後悔とかといった“物語”を、秘められた“内面”を語ることの“思いがけなさ”。千歳に訪れたものは、そのこと自体の“腑に落ちなさ”ではなかっただろうか。

だから、千歳はその一俊の物語に乗って、彼を責めるとか、許すとかというふるまいを見せない。中村枝里の母親の死去と葬儀をきっかけとして、千歳は何も言わず、何の意味をも語らずに、一俊の元へ戻っていく。

交差点のスーパーマーケットで、食パンとりんごとインスタントコーヒーと牛乳を買って帰った。四階の部屋に着いてから、コーラかなにか買ってくればよかった、と一俊が言った。

千歳は、荷物を片付け、洗濯物を洗濯機に放り込んだ。片付けているあいだ、一俊は溜まっていた食器を洗い、ノートパソコンを開いてメールをやりとりした。

同じ部屋の中で、自分以外に動いているものがある。自分の意思とは関係なく、勝手に動いている人がいる。この小さな空間に、誰かがいる。面倒だが、それが誰かと生きていくということなんだろう、と千歳は思った。

横になってから、千歳と一俊はしばらく抱き合ってみたが、千歳は三分もしないうちに眠ってしまった。(248)

二人が、二人の生活を取り戻す場面である。しかし、ここには、“生活”以外の何もない。同じ部屋で、自分の意思とは無関係に動いている人がいる、という剥き出しの事実だけが語られ、そのことについて“まあ生活とはこういうものだ”という静かな受け止めが生じている。彼女はただ“生活の共同”を再選択している。そこに戻ってくるということが、千歳なりの物語の進め方であるのだ。

その一方で一俊は、上のような告白をしておきながら、結婚しようと思ったのはそれ（千歳とであれば、子どもができないことは障害にならないこと）が理由ではない、と言う。

「千歳さんといっしょに暮らしたいと思ったんだ、信じてもらえないかもしれないけど」(190)

そう言われて千歳は、ここで問われている「信じる」ということの意味がつかめずに黙っているのだが、一俊が嘘をついているとは思わない。

一俊の中にもまた、何かしら千歳との生活を選択しようとする「理由」がある。そしてそれは、自分には分からないものだと思う。

また後日の場面で、千歳は言う。

「わたし、人ってよくわからない。想像しても、自分以外の人の気持ちはわからないし、生きてるってことも、死ぬってことも、どういうことなのか、よくわかってない」(238)

「それ以上のことは、めんどくさいし、しんどい。人に関心をもたれるのも、何か不安になる。期待にこたえられないから。だから、一人のほうがいいと思ってた」(238)

これに答えて、一俊は言う。

「うん。そんな感じがしたから、いっしょにいたい、結婚したいと思った」(238)

この言葉の意味は、千歳にはやはり分からないままである。しかし、彼女は「一俊の中には何かしら筋の通った理由があるのだと」理解する。そして「それに比べて自分には、一俊と結婚したことについて、自分自身にさえ説明できるような理由がないよう」に思う。

この一連のつながりで、千歳は一俊という他者を発見している。そして、“他者”というものは、結局のところよく分からないものだというを確認している。その上で、よく分からないけれど、どうやらその人はそれなりの理由をもって自分との生活を望んでいるのだという事実を受け入れて

いく。そこに選択される“生活”は、それぞれの内面の物語を互いに理解し、共同化していくということの上に成り立つものではない。生活とはただ、よく分からない誰かと同じ小さな空間を共有していくということなのである。

5. 「私」がいなかった街で

ここまで、千歳という人物の物語をたどる形で、この作品を読んできた。しかし、『千の扉』は本当に、千歳を主人公とした、彼女を中心に据えた小説なのだろうか。どうも、それは見かけの罫であるという気がする。少なくとも、彼女のストーリーを軸として何かを読み取ろうとするだけでは、かなり大きな部分が零れ落ちてしまう。というのも、この作品には、千歳の生きてきた生活史の枠の中には収まらない、複数の異質な時間が流れ込んでいるからである。

それは、一言で言えば、千歳がこの団地にやってくる前に、この団地という場所に起こった出来事が作り出す時間である。千歳はこの場所に蓄えられた過去の一端に触れ、それを垣間見てはいるのだが、しかし、その時間の大半は彼女の視界には現れぬまま、それでも彼女が生きている場所を構成している。

この多層的な時間が、どのように作品の中に呼び込まれているのか。ここで、二つの仕掛けに着目しなければならない。

ひとつは、作品中に頻繁に挿入される、過去の場面を語る節である。それは、勝男や圭子や一俊等を視点人物とする断片的な語りであるが、それぞれがどのような連鎖の中に置かれているのかがすぐには分からない形で投げ込まれており、テキストのあちこちに“謎”を仕掛ける効果をもっている。

もうひとつは、千歳が請け負っている捜索行為の顛末である。「高橋征彦」という男が団地のどこかに住んでいるはずなので見つけだしてほしいと、勝男は千歳に依頼する。千歳は、広大な団地の域内を歩き回り、たくさんの「高橋」という表札を見つけ、その中からこの人とは思える人物を絞り込んでいく。先述のように、その捜査は結局目当ての人物にはたどり着けず、高橋征彦はすでに他界していたことが明らかになるのであるが、この「高橋」と「勝男」との因縁が、断片的に挿入された過去のエピソード物語とつながって、ひとつの物語を立ち上げることになる。この全体的な構成において、『千の扉』は（場外に退いているように見えた）勝男の物語をこそ語っているようにも見える。“探偵”の行為が“依頼者”の生きた軌跡をなぞる役割を負って他者の物語を浮かび上がらせるのは、ミステリー文学の常道とも言えるが、それと相同的な作話上の仕掛けがほどこされているのである。

では、この謎解きの語りを枠組みとして、ゆっくりと読者の前に浮かび上がる“物語”とはどのようなものであったのだろうか。

(1) “家族” の物語

作品の冒頭、いきなり“謎めいた”場面が語られている。それは、いつ、どこでのことなのかも判然としない。「彼女」と記された一人の女が、夕暮れ時の坂道を下っている。と、どこかの家から「バイオリン」の音色が聞こえてくる。「彼女」は、「焼け落ちる前の家にあったレコードで聴いた曲」を思い出す。その道の先に、人影があることに気づく。それは「痩せた、若い男」で、「バイオリンの旋律が聞こえてくる窓を眺めて」いる (3-4)。

「焼け落ちる前の家にあった」という記述は、これが戦後間もない頃のことであっただろうと推測させる（それ以外に、時代や時期を示す手がかりは与えられていない）。この「彼女」とは、そしてこの「男」とは誰なのか。それは、作品の終盤になるまで明らかにならないし、この一節が千歳や一俊の物語に関わる気配すら見せない。それは、テキストが、表向きに進行させている物語とは別の水準に、また別のシークエンスを潜ませているのだということを、その冒頭においてほのめかし、作品全体の時間的な多層性を予告している。

あとからふり返って見れば、この場面に連なっているのは一俊の祖父・日野勝男の若き日の物語である。そのストーリーは、作品の終盤になってようやく、次のようなものとして明らかになる。

日野勝男は1930年生まれ (11) (現在は85歳 (20) である)。

戦争中に父親は船の事故で、兄は結核で亡くなり、母親も終戦から2年後に病気で死んでしまった (122) (228)。

母が死んで、間借りしていた家の物置を出なければならなくなり、半年ほど路上生活を送る。小学校の同級生の兄が部屋に置いてくれ、日雇いの仕事ができるようになる。その兄のついで、19歳のときに、江戸川橋にあった印刷会社に仕事を見つける。

その半年後、20歳の時、街中である家の窓から聞こえてきたバイオリンの音色に足をとめ、そこでひとりの女・高橋詠子 (23歳) に出会う。詠子は事務用品の卸会社に勤めている。二人はやがて親密な関係を結ぶようになり、出会ってから半年後に、勝男は結婚を申し込む (229)。しかし、陸軍の将校であった詠子の父親は、勝男との結婚を許さない。詠子は、二人の弟を大学に行かせ、妹が高校を出て結婚するまでは自分が家を支えなければならないと言って、勝男に別れを告げる (231)。

その2年後、親戚の娘・和子を紹介されて、結婚。1年後に子どもを身ごもるが、難産で母子ともに命を落としてしまう (231-232)。

その後しばらくは、ひたすら働く日々を送るが、新宿西口の焼鳥屋の店員をしていた女・花江に出会う。花江は、結婚できない相手の子を妊娠しているという。「おれはその子供を育てたい」 (233) と言って、二人は結婚する。

やがて圭子が生まれる。二人は神田川の近くのアパートに暮らしていた。勝男は建設途中のこの団地を見ていた。高倍率の抽選に当たり、1970年に入居。そして、偶然この団地に住んでいた、高橋征彦に出会う。征彦は、詠子の弟であることが分かる。しかし、勝男は、自分が姉の詠子と関係をもっていたことを悟られなくて、深くつきあうこともなく、時間が過ぎてしまう (征彦が何号

棟に住んでいたのかも分からなくなる)。しかし、今になって、体が弱って、「自分が死ぬのが近いと思ったら」(234) 征彦と話したくなった。それで、千歳に頼んで探してもらっていたという。

そして、この年の11月に、一俊と千歳は近くのアパートに居を移し、その翌週、勝男は団地の部屋に戻ってくる。翌年の2月、彼は団地の自室で心不全のために息を引き取る。

孤児として（一時は浮浪児として）戦後を生き延びてきた一人の男の履歴（勝男の住んでいた部屋に仏壇がないのは、彼が“家”を失った存在であったからだ）。戦争ですべてを失い、愛した女と結ばれることもなく、妻と娘を失い、自分の血を引かない女の子を娘として育ててきた男。その一生の物語の幕が下りる場所として、この団地の一室はいかにもふさわしいものと感じられる。

しかし、語られているのは、勝男のライフストーリーだけではない。挿入された断片の中には、圭子の若き日のエピソードや、一俊の少年時代の記憶が織り込まれている。

高校を卒業して、機械部品の会社に勤めていた圭子は、同じ団地に住む中学時代からの同級生・育代から、大学生の「彼」の子どもを妊娠したらしいと告げられる（圭子は、自分が勝男と血のつながりが無いことに気づいている（83-84））。

ある日、団地の中で、一人の男に声（団地のすぐそばにある大学の学生）をかけられ、写真のモデルになってくれと頼まれる（85）。小石川公園で撮影会（156）。その後、撮影以外の時にも会うようになり、映画を観に行った。しかしある日、警察が訪ねてきて、男が過激派の友人の逃走を手助けして逮捕されたと聞かされる（177-179）。

そうした一連の出来事は、おそらく1960年代の末から1970年代前半のことである。新宿駅の西口の広場に大勢の人が集まり、あちこちで学生や若い人が歌を歌っていたり、街角で急に演劇が始まったりする。同級生の中には、劇団に入った者も、デモに参加した者もいる。しかし、圭子は、いつも後ろのほうで、それを眺めているだけだった（137）。

一俊は1980年頃の生まれ。団地に住んでいたのは、1980年代の末から90年代の半ばのことであると推測される。一俊が思い起こすのは、団地で特撮ヒーローものの撮影があったこと（14-18）。「山」で豹を連れてくる人を見たこと（48-49）。中学校の夏休みに、同級生たちと自転車でテレビ局に行き、タレントの出待ちをしたこと（92-93）。同級生の祖父に「左腕の肘から先がなかった」（93）ことなどである。

こうして、勝男－圭子－一俊の三世代にわたる家族の物語が語られていく。つまり、互いに識別することの難しい並列された生活空間の一つひとつに、固有の物語があることが明らかになっていくのである。

（2）“場所”の物語

だが、語られていくのは“この家族”の物語だけではない。挿入されていく断片は、この土地の履歴、この場所に起こった過去の出来事を伝えるものでもある。最も古い場面は、戦時中の記憶。

ある断片では、「よっちゃん」と呼ばれる、団地内の「広場のベンチに腰掛けて、しょっちゅう煙草を吸っていた男」（60）が視点人物に置かれている。彼は団地の住人ではないが、この場所で

小学校時代の同級生に再会する。それが高橋征彦で、その父親が「陸軍さんで偉い人」なのだという紹介がなされるのであるが、その場面で、「よっちゃん」は戦時中のものと思われる光景を想い起こしている。

同級生は他の知人たちの近況を話していたが、男はろくに聞いていなかった。視線を移すと、築山が見えた。その形だけが、子供の頃の記憶の風景とつながっていた。あの頃近くを通ると、自分たちより年上の少年たちが、軍事教練をやっていた。縄を上がったり、斜面を駆け上がったり、教官に怒鳴られながら走っていた。あいつらは何歳だったんだろう。みんな死んだんだろうか。(62)

この場所が陸軍学校であった時代の記憶。「山」だけが、その場所の同一性を確かなものにする痕跡として、「団地」の中にそびえている。

そして、戦後、平屋の住宅だけが並んでいた頃に、日野勝男はやはり「山」を見上げながら、過去（終戦を迎える直前）の光景を呼び起こしている。

戦争の間も、このあたりを幾度も通った。鉄屑を拾って帰ったこともあった。空襲がひどくなって身を寄せていた遠縁の家から、追い出されるようにして戻ったのは七月のことだった。十五歳だった。戻ってきたら知っている家はほとんどなくなっていた。だだっぴろい、^{がれき}瓦礫の転がる風景が続いて、遠くに見える焼け残った建物はなんだろうと目を凝らすと、驚くほど遠い場所だった。(101)

空襲によって焼け野原になってしまった頃の、この場所の記憶。空襲の記憶は、作品の終盤でも、一人の「少年」が見た光景として、再び呼び込まれる（その少年は勝男かもしれないし、そうではないのかもしれない）。

晴れていて、暑かった。

道の両側にあった家は、今は残骸に過ぎなかった。空襲の翌日だった。焼けた家や黒焦げの死体を、何人もが見に来ていた。

性別もわからない死体を、しゃがみ込んで見ている老人がいた。身内の死を悲しんでいるようには見えない。観察するように、左右に頭を動かしてずっと見ている。なにかするつもりだろうか。少年はその老人の脇を通り過ぎながら思ったが、すぐに忘れた。どうでもいいか。あの男も、今日死ぬかもしれないのだ。それに、自分が一年前まで住んでいたこの辺の様子を見に来たのも、見物気分じゃないのかと言われれば、明確に否定できない。

まだくすぶっている残骸もあった。ラジオの音もなく、人の活動している音が消えて、静かだった。たまに通るトラックのエンジン音が遠くからでも聞こえた。(250-251)

団地は、というより東京の町は、この廃墟の上に再構築されたものだ。流れ込んできた人口を抱え込むための「集合住宅」が建てられた場所は、「だだっぴろい、瓦礫の転がる風景」が広がる空間であった。

テキストはこうして、その場面を目撃した人を入れ替えながら、「土地の記憶」を呼び覚ましていく。千歳が迷い込んできた団地という場所が、どのような時間の積み重ねの上に成り立っているのかを、語りの多層化によって描き出している。

この土地の履歴、かつて起こったこと。その一部は、勝男や一俊らの語りを介して、千歳にも知られることになる。高橋征彦探しは、勝男が生きてきた過去の物語に触れる機会である。しかし、断片群の中に語られたことの大半は、彼女の目には最後まで触れることがない、誰もそれを語って聞かせることのないエピソードである。作品の中心人物の視界には届くことのない出来事の挿入。それらは、千歳が今生きている物語に直接的な形ではつながっていないように見える。しかし、この場所には確かに、いくつもの時間が層をなして積み重なり、ところどころに過去が露出している。千歳が今この団地に生きているということは、こうした見えない時間、潜伏しておそらくはもう誰も想起することのない物語的時間の流れに足に浸す、ということでもある。

（３）無数の見えない時間

かくして、ある場所に生きるということは、そこに顕在化していない過去の影響力の圏内に身を置くということである。現在時を生きる個人の視野に、その時間の奥行きが立ち現れるわけではないとしても、そこに生きる人や現れる物たちは、その時の重みを秘かに抱え込んで、この場所を構成している。千歳は、夫が少年時代を、その祖父がその人生の大半をすごしたこの団地を探索し、勝男の物語の一端を聞くことによって、この場所を支える時間の厚みに触れ、そしてそのことになにほどの自覚を得ているように見える。少なくとも、それぞれの「部屋」の見えない場所に、それぞれの物語があることを想像している。

作品の最後の一節。その書き出し。

千歳は、ゆっくりと歩いて、立ち並ぶコンクリートの建物たちを見上げた。無数のベランダと廊下と扉が、規則正しく並んでいた。毎日同じ場所にあって、そのときも変わらなかった。高低差のある敷地を歩いていると、高層棟の廊下側がよく見える場所に出た。

同じ形、同じ重さの扉。水色が薄い黄色の、新聞受けのついた金属の冷たい扉。その中には、誰かが住んでいる。家族か、誰かの家族だった人。家族と離れている人。家族を作ろうとした人。家族になった人。一人で過ごしている人。すぐそばににいるのに、どんな暮らしをしているのか、扉の向こうは見えない。(269)

「見えない」ということが、団地的関係の疎遠性だけを意味するものではないことは、すでに明

らかであろう。無数の見えない時間の並列。その相同性の奥にある、それぞれの暮らし、その履歴、その集積が「団地」の時間を作り出しているのである。

6. 「ノスタルジア」とは別の形で

さて、それでは私たちは、この小説のテキストが浮かび上がらせる「時間」と「空間」の交錯に、どのような生の可能性を読み取ればよいのだろうか。この問いに対してまだ十分な考察をめぐらせ得る地点までたどり着けていないが、『千の扉』についてはすでにひとつの社会学的読解が示されており、これを参照しつつ論点を明らかにすることで、中間のまとめにかえよう。

阿部公房の小説『燃えつきた地図』（1967年）とともにこの作品を取り上げた論文「団地ノスタルジアのゆくえ」において、菅原祥（2019）は『千の扉』を「近年において団地ノスタルジア的な感性によって書かれた代表的作品」（同：76）として位置づけている。「団地ノスタルジア」とは、一種の「なつかしさ」を掻き立てるものとして「団地」を語る言説や表象、あるいはそれを構成する「まなざし」のありようを指す。ただし菅原は、『千の扉』が「過去への単純な『回帰』『古き良き過去』への郷愁を志向しているのではなく、「団地というある特定の物理的空間を舞台とした過去と現在の間の『時間の経過』『現在の団地の地層の中に堆積している過去から連綿と続く『記憶の積み重なり』」（同：77）を描き出していることを、正確に指摘している。その点において、この作品に見られる「ノスタルジア」は、「美化された過去への回帰」とは明確に異なる、反省的な想像力のありようを示している。菅原は、スヴェートーナ・ボエムの用語を借りて、これを「反省的ノスタルジア」（同：78）と呼ぶ。「喪失された想像上の故郷を回復しようとする（…）回復的ノスタルジア」との対において、「反省的ノスタルジア」は、「故郷への回帰」とそれによる「全体性の回復」という課題に疑問をつきつけつつ「過去への切望に拘り続けるような想像力」のありようを指す。ここに見いだされるのは、『過去』を批判的・反省的に想起することを通じて他ならぬ『現在』の只中に新たな創造的可能性を作り出すような想像力（同：79）である。

このような想像力の作動をなお「ノスタルジア」と呼び続けることが最善かどうかについては議論の余地がありそうだが、この2つのノスタルジア概念の区部を通じてひとつの論点が示されていることは間違いない。「古き良き過去」を懐かしみ、「回帰」と「回復」の欲望を喚起しようとする想像力の作動とは明確に異なる形で、『千の扉』は、過去とのつながりを想起、想像し、表象しようとしているということ——菅原は論文の後段ではこれを、「反ノスタルジア的」な志向性とも呼んでいる。

そのノスタルジアとは別の形で作動する過去へのまなざしは、作品中の記憶のありように端的に表れている。菅原が指摘するように、「作中で呼び出されるさまざまな記憶」は「登場人物相互の間で互いに共有されることがない」。「記憶は互いに有機的に連続してひとつの記憶共同体をつくるというよりは、ただ隣接しているだけなのである」（同：92）。ただしそれは、ここに交わる人々のあいだになんら「共同性」が存在しないということではなく、「団地という同じ場に生活した無

数の人々の記憶の断片がそこに集積することから生じるような、ゆるやかな共同性」(92)が見いだされようとしている、と菅原は言う。

たしかに、『千の扉』において、多様な「視点」から断片的に語られる団地の「過去」の情景は、そこに生活する人々のあいだで共有された記憶——言葉の強い意味での「集合的記憶」——を構成するわけではないし、それ以前に、この場所に移り住んできたばかりの千歳の目の届くところに現れるわけではない。土地の来歴、場所の記憶、住人それぞれの思い出は、無数に並列する「部屋」と「部屋」の関係のようにただ隣接し、かといって完全に閉ざされるわけでもない、曖昧な接続関係の上に累積している。千歳は、「高橋」の搜索を通じて、夫の同窓生たちの会話を通じて、隣室の住人たちとの交流を通じて、断片的にその記憶に触れはするが、その全貌を把握するわけではないし、元より彼女は、この団地という「共同体」のメンバーとして定着するわけでもない。千歳は、ほんの短いあいだこの団地に暮らし、やがて転出していく存在（通過者）である。

視点人物を千歳に集中させず、自由自在に点在させるこの小説の語りの形式は、個人の視点が決して共同体的な視点（集合意識・集合的記憶）に包接されるのでもなく、他方、その集合的な集積を俯瞰する位置に立つのでもなく、各自の限定的で部分的な視野の果てしない交錯と累積の上に「地域」の時間を、あるいはその「履歴」を構成していく様を見事に描き出している。小説の主人公（に見える）千歳もまた、その断片的に局在的な視点（共同的世界の中心にはいない一住人）としてあるにすぎない⁴⁾。

その上で、物語において重要な点は、この女性がその生活史の移行の一局面を生きていく上で、この「土地の記憶」に「接触」したことが大きな意味をもっていることである。先にも確認したように、千歳は、どこに自分の生活史上の課題があるのかもつかめないまま“ふわふわ”とした形で生きており、どこか成り行きで一俊との結婚を選んだようにも見える。彼女は“生活史の履歴”の上に“自己の生”の所在を確認することができない人物として現れている。その千歳が、数か月間の団地での生活、そして夫の祖父・勝男との死別を経て、たしかに次の生活に向けて歩みを進めようとしている。特に何か具体的に大きく変わったわけではない。しかし、彼女は明らかに、この団地という場所に積み重なってきた時間があること、無数の「扉」の内側にそれぞれの生活の歴史があることに気づいている（その物語の内実のほとんどは、彼女の目には届かないものであるとしても）。そのような形で、「隣接する記憶」への「接触」が、千歳という人物のイニシエーションの物語を支えている。

ここでの、微妙にして繊細な変貌の様相は、大阪の市営住宅に生まれ育った千歳が、まったく同型の設計に基づく都営住宅に移り住むという設定を介して、巧みに語られている。当初、都営住宅での生活は、過去の大阪での生活の同型的反復でしかないように見える。しかし、大阪の市営住宅が、臨海の埋め立て地に建てられたいわば「過去なき土地」であったのに対して、この「都営住宅」は土地の履歴に満ちており、その過去は確かに現在の団地生活の中に露出し、浸潤し、なにがしかのつながりを残している。象徴的に単純化すれば、過去なき土地に生まれ、たしかな履歴を獲得しきれずに生きてきた人が、この土地の過去に触れて、新たな人生を歩き出す物語。『千の扉』

はそのようにも読める。

ここに、菅原の言うような「新たな共同性」の創出、新たな「ユートピア」を立ち上げていく「批判的で創造的な想像力」(97)の発現を見るべきかどうか、私たちにはまだ答えを出せない。この物語が、いかなる現実の都市空間の触発によって生まれ、また、そこに生活する者たちの世界にどのような「想像力」を備給するのか。これについては、物語の舞台となった土地に分け入りながら、さらに検討を重ねていきたい。

【注】

- 1) 日野勝男は1970年に入居した(18)とあり、それはこの団地ができてすぐのことであったと推察される。
- 2) 団地における同型の空間の反復は、千歳の祖父母が住んでいた部屋と圭子たちが住む公団の間取りの同一性としても指摘されている。
- 3) この点については、＜自己・表象＞研究会における議論、特に松下優一氏の発言から大きな示唆を得た。
- 4) こうした、視点人物の脱中心化は、『わたしがいなかった街で』にも見られる(鈴木 2018参照)。

【テキスト】

柴崎友香(2017)『千の扉』中央公論新社

【参考文献】

- 菅原祥(2019)「団地ノスタルジアのゆくえ——阿部公房と柴崎友香の作品を手がかりとして」、『京都産業大学論集 社会科学系列』第36号, 京都産業大学
- 鈴木智之(2018)「テレビ・戦争・住宅地——柴崎友香『わたしがいなかった街で』における日常の形」、『社会志林』, 第65巻・第1号, 法政大学社会学部学会